

報告概要

2010年現在、日本における妊婦健診は、毎回超音波診断が提供されるという特異な様相を呈している。一体いつから、妊婦健診に超音波診断装置が導入され、普及していったのか。また、同装置が急速に普及・浸透していった要因は何なのか。戦後の医療制度再編と、産業構造の転換からみえる要因とそれに伴う諸政策を考察する。そして、その結果、サービスの受け手である妊婦はどう変容したのか。これまでの著者の既出報告を基に、医療テクノロジーと妊婦の身体感覚への影響について考察する。

既出論文

2007、妊婦の身体感覚と胎児への愛着の関連性、日本助産学会誌、21(1)、6-16

2007、病院出産に伴う出産介助者の変更とその要因－医療制度の再編が行われた1945(昭和20)年から病院出産が成立した1974(昭和49)年を中心に－、川崎医療福祉学会誌、15(2)、Pp385-392.

2006、病院出産に伴う出産場所の移行とその要因－医療制度の再編が行われた1945(昭和20)年から病院出産が成立した1974(昭和49)年を中心に－、母性衛生、46(4)、Pp570-579.

2005、ペリネイタルケア連載

2005、超音波診断を含む妊婦健診と、超音波診断を含まない妊婦健診を受けた妊婦の体験：妊婦の心理と身体感覚を中心に、川崎医療福祉学会誌 川崎医療福祉学会/川崎医療福祉大学、15(1)、85-93

2005、日本における妊婦健診の実態調査、母性衛生、Vol. 46, No. 1 (20050401) pp. 154-162

2004、妊婦健診時に用いられる超音波診断についての諸議論、川崎医療福祉学会誌、14(1)、11-18

2004、超音波診断を含む妊婦健診の導入と普及要因、川崎医療福祉学会誌、川崎医療福祉学会/川崎医療福祉大学、14(1)、59-70

2003、医療テクノロジーと妊婦の意識の変化－超音波検査法による妊婦健診の参与観察から－、課題番号 13837021 平成13年度～平成14年度科学研究費補助研究基盤C(2)研究成果報告書、平成15年5月